緑陰

「緑陰」題字
本庄第一高等学校　木元彩乃

第30号
令和８年９月１日発行

一般社団法人埼玉県私学協会
〒330-0063
埼玉県さいたま市浦和区
高砂４丁目13番20
電話 048-863-2110
HP
www.saitamashigaku.com

今こそ私学

東野高等学校　理事長　中川　進

日本の教育、という言葉を聞くと、呼応するかのように、不登校・いじめ・貧困・教員不足、などといった単語が決まり文句のように出てくる。しかしどの言葉をとっても、その一つひとつが教育界の現状を表現しており、どの私学もこうした言葉に対処すべく精一杯の努力をしているのであるが、思うように解決というわけにはいかないのが現実だと思います。

フリースクールや教育支援センター、といった学外で学びを続けられる環境。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、といった相談者に対応してくれる専門家の常駐。奨学金の支給。教員の働き方改革や部活動の地域移行、支援スタッフの配置。などといった対応が多くの学校に行き渡るには国や県の支援が必要であることは言うまでもありません。

ところで２０２６年、私学を取り巻く環境は大きく転換しました。

国による私立高等学校の授業料実質無償化がスタートし、公立と私立の授業料格差が改訂されたことにより、家庭の経済状況に関係なく全ての生徒が、カリキュラム編成やグローバル教育、クラブ活動や校風など、公私の別なく、自分の意志で希望する学校を選べるようになりました。「学校選択の自由」が保障される、というあるべき姿になったことを歓迎するものです。

公立高校の授業料無償化は２０１０年より実施されましたが、同年、私立高校には授業料の一部を支援する「高等学校等就学支援金制度」が導入され、今年度ようやく「実質無償化」に漕ぎ着くことができたわけです。

また、埼玉県から交付されている県独自の支援制度である「私立学校運営費補助金」も今年、高校・中学校・小学校ともに大幅に増額されました。埼玉県私立学校保護者会連合会を始めとする各分野でご尽力を頂いた関係諸氏に改めて感謝を申し上げます。

２０２５年の日本人の出生数は76万人。その10年前の２０１５年までは１００万人を割ったことのなかった数字です。幼児・児童・生徒の数がはっきりと減少期に入り、少子化が教育界に留まらず、日本の国力さえも左右するなどと心配されています。

そうしたなか、今年の本県私立高校入試は、定員超過人数、前年度８８８人から今年１５８２人と増え、超過率は1・05倍から1・09倍となり入学者も約５００人増えて１９０００人を超えました。

中学校でも今年度、新設の中学が開校し、私立中学全体の入学者は、過去最多の４０００人を超えました。

また、今年度より県内の私立小学校が埼玉県私学協会に新しい仲間として加わりました。その私立小学校全体の各学年毎の人数は6学年ある中で、今年の新入生である1年生が最も多い人数となっています。

私学の地道な努力が、受験生と保護者、また教育関係者に認められ、地域に根を張ったのが今日の姿だと思います。どの私学にも創立者の「建学の精神」・「教育理念」と呼ばれる教えが、時代が変わっても脈々と受け継がれています。そうしたしっかりとしたバックボーンを背景に人間育成が教育の根底に流れているのは、やはり私学の強みだと思います。

少子化にともなう労働人口の不足、ＡＩなど先端技術の高度化によるデジタル社会の光と影、刻々と変化する世界における日本の国際影響力の低下など。これからの日本はいくつもの課題を乗り越えることができなければ、世界から取り残されてしまうことでしょう。

「正解のない時代」とはよくいわれますが、これまでのような、一つの基準で物事を判断できなくなっている現代。求められているのは「教育の力」です。常に真実を追求し、世界を眺めながら、人間教育と時代の変化に対応してきた私学の教育こそが、今こそ求められている時代ではないでしょうか。

「私の図書館」

聖望学園中学校高等学校　理事長・校長　関　純彦

アメリカの大学教授のご夫人が、夫の勤務先の大学図書館を〝It's my library.〟（私の図書館です）と誇らしげにおっしゃっていたことを思い出します。そこで、これまでの私の図書館の遍歴をたどってみたくなりました。

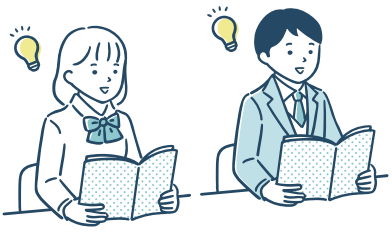
初めて、自発的な読書の楽しさに触れたのは伝記作家たちの偉人伝でした。最初の私の図書館は、西浦和小学校に通っていた頃、北浦和駅近くの市立図書館でした。田島から国際興業バスで浦和駅まで行き、京浜東北線を乗り継いで通っていました。自宅近くに、時折バスの移動図書館もきましたが、読みたい本が少ないのと、返却と貸出しの間隔が長くなるので、あまり積極的には利用しませんでした。小学校の図書室の本は、興味のある本はだいたい読んでしまったので、あまり利用しませんでした。埼玉会館の裏手にあった県立図書館は、新聞や資料がたくさんあり、調べ学習には時々行きましたが、借りたい本はそれほど多くはなかったかと思います。それらに比べて、市立図書館はとても新しい建物でしたし、蔵書の内容も小学生には十分すぎるぐらい素晴らしいものでした。

中学校は、兄と同じ土合中学校に通う予定でしたが、田島中学校が開校したので、そちらに通うことになりました。新築の校舎だったので、図書館も本も全て新しかったのを覚えています。担任の先生が国語の先生だったので、文学作品などを読み始めていました。部活動や授業など全てに渡って新しい生活だったので、本とは少し距離ができました。3年生になる頃、母の転勤のため、新座第二中学校に転校しました。高校受験もあったので、ほとんど図書室を使うことはありませんでした。

高校に進学すると、ハードカバーより文庫本に愛着がわくようになりました。新潮文庫や角川文庫などの文庫案内で捜しながら、様々な作家の本を読んでいました。文庫だけの本屋を作り、そこのオーナーになりたいと思うこともありました。学校の図書館では、本の貸出しや閲覧室の利用も楽しんでいました。

大学時代の私の図書館は、ヨーロッパの宗教改革者マルチン・ルターに関する蔵書が沢山ある学校の図書館でした。少人数の大学で、職員も学生もほとんど顔見知りで、利用者カードはありましたが、開架式の書庫に出入りが自由でした。神学や社会福祉学などの専門書に親しみました。図書館では、本の整理や蔵書点検のアルバイトもしました。むしろ一般図書は、公立の図書館で借りていました。院生時代の私の図書館は、セキュリティが厳重でデジタル入館証がある都会の大学の図書館でした。膨大な蔵書の中から論文や課題に必要な本にたどり着くためのツールは、データベースを使って瞬時にできました。一方テーマやヒントを探すときは、ただ大海原を漂うような気持ちで、館内を歩き回り資料を探す経験をしました。

現在の私の図書館は、聖望学園図書館です。社会人になってから本に対してどちらかと言えば、借りて読むよりは、所有して読む方が好みでした。しかし、このような身近な図書館は、貸出し、返却がとてもスムーズで、本が自宅の書棚に埋もれたり、積読を防いだりするためにも、図書館の利用はとても合理的です。この図書館は、ライトノベルから一般図書まで幅広い蔵書が特徴です。また、公立図書館では、かなり順番待ちになる新刊も比較的早く手にすることができます。聖望学園が舞台の漫画「ヤマノススメ」も、もちろん全巻揃っています。司書教諭の浦野先生は、図書通信などの情報発信や、授業とのコラボレーションを通じて図書館の親しみやすさや活性化に取り組んでいます。特に夏休み前に生徒に配布される、「先生が勧める本」は、推薦する私たちも生徒と図書館との懸け橋になるように、様々なジャンルをそれぞれの個性に応じて、推しています。今の私の図書館は、自分が利用するだけではなく、生徒、教職員、卒業生や来訪者とのハブとなる、とても魅力的なところです。単に本を借りる場所にとどまらず、みんながつながる「知の拠点」として、大きな役割を担っています。今後もこの図書館が、多くの皆様にとって親しみ深い存在となることを願っております。



平和をつくる人　その2

青山学院大学系属 浦和ルーテル学院小中高等学校　理事長・校長
福島宏政

前回2023年12月発行の緑陰第25号で、当校高等部の平和学習について書かせて頂きました。今回は中等部の平和学習について書かせて頂きます。前回の寄稿から3年弱経ちましたが、この間、世界中で戦争は増えてしまいました。平和は益々脅かされています。一方、平和学習のあり方を巡っては、様々な意見が交わされています。私は基本的な事実の確認と、一人ひとりが出来る小さな事について考えることが大切だと考えています。

当校では、平和学習の一環として、中学3年生が広島の平和記念施設を訪問します。今年は私も引率教師の一人として同行しました。戦争が多発している今だからこそ、戦争の悲惨さと平和の貴重さを心の深いところで感じ取ってほしい、そんな思いで企画している研修旅行です。広島駅に着いてバスに乗り替えます。新幹線の中からずっとにぎやかだった生徒達も、バスガイドさんから原爆投下当時のお話を聞き、平和記念資料館が近づくにつれて、次第に改まった表情になってくるのが分かりました。

資料館の展示室入り口には原爆で傷ついた一人の少女の写真が掲示されています。左手を負傷し、顔は爆発による無数の破片で傷ついています。その後どうなったのだろう、と気になりながら中に入ります。展示室では、ひどい火傷を負いながらさまよう人々の姿や、3000度の熱で溶けたガラス瓶、亡くなられた方々の遺品などの展示物が生々しく当時の状況を語っています。生徒達は言葉もなく展示に見入っていました。私が最も印象に残ったのは「三人の中学生の遺品」という展示物です。別名「三位一体の人形」とも呼ばれています。原爆によって亡くなられた3人の男子中学生のそれぞれの遺品、一人は帽子、もう一人は学生服、三人目はゲートル（脛を覆い保護する装身具）を集めて一体の像として構成されたものです。彼らは当時爆心地近くで建物疎開という作業に従事していました。原爆の直撃を受けた彼らの体は爆風で数メートル巻き上げられ、その後地面に叩きつけられました。見学する生徒達と同世代の子ども達が強いられた過酷な最期。それを思うと、こみあげてくる涙を押さえることが出来ませんでした。

その後原爆ドームに向かいます。奇跡的に残ったドームは原爆被害を象徴する建物として世界文化遺産に登録されています。ところが一時は忌まわしい過去を忘れたいという意見により、取り壊しが検討されたそうです。しかし、被爆による白血病で亡くなった一人の女子高校生の日記での訴えが反響を呼び、保存が決まった経緯があります。この建物なくして原爆の威力や恐怖はリアルに伝わらなかったでしょう。その意味でドームの存続には他の何物にも代え難い意義があります。一人の小さな働きが、社会を大きく動かすという例だと思います。また、公園を案内してくださったボランティアガイドさんの質問が印象に残っています。「皆さん、今、世界に原爆がいくつあるか知ってる？」生徒達「10個？それとも100個くらいかな」ガイドさん「うーん、アメリカとロシアを合わせて1万発もあるのよ」生徒達は絶句しました。ガイドさんは続けます。「でもね、それでもよくなった方なの。40年位前は世界中で7万発もあったのよ。でもそれが今の数にまで減ったのは、広島の人達が声をあげて、世界中に呼びかけたからなの。だから私たちの平和への思いは無駄にはならない、きっと実を結ぶ」生徒達は深くうなずいていました。

聖書に「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイによる福音書5：9）とあります。「平和を実現する」とは、偉大な人物による壮大な事業のように思われます。私達のちっぽけな力では到底手が及ばない事のように思われます。しかし実は日記で訴えた女子高生や原爆の削減を呼びかけた人達など、名も無い小さな人々の働きの積み重ねなのだと思います。平和記念公園を後にした生徒達はすぐに屈託のない笑顔に戻っていました。戦争と平和が深刻にせめぎ合う現実を、すっかり忘れてしまったかのようです。しかし、彼ら彼女らは、平和の貴重さを心の奥に静かに刻んでくれたと信じています。

人を〝動かす〟

大宮開成中学・高等学校　校長　松﨑　慶喜

並み居る埼玉私学の皆様の前で僭越な題ですが、若輩者の私が今日までやってこられたのは、数々の人生の先輩のアドバイスにほかなりません。私の中には今なお、学校運営の局面で自分を助けてくれる二つのことばがあります。

1　落としどころをもつ

私は就職してしばらく、利害相手との交渉がとにかく下手でした。私の仕事が文化財保護という国民共有の財産の保護と、個人に不利益を受忍してもらうこととのバランスを取らなくてはならない繊細な業務だったというのもありますが、交渉で相手に押し切られるか、強く出過ぎてこじれるか。厳しい先輩は「お前はいつもまとめられないな」と怒り、後始末に出てくれていたのでした。

交渉下手の理由は単純、「自分の立場」を伝えるのが苦手だったのです。人が好いといえば聞こえはいいですが職業人としては自己保身、責任放棄に過ぎません。

見かねた先輩は「いいか松﨑、交渉はまず〝ふっかけろ〟。初めはわざと120要求する」「そして必ず〝落としどころ〟をもて、どこまで譲れるか。譲って100か80でも実現すれば、お互い気持ちよく終わるじゃないか」。確かにこの方法をとると、不思議と先輩の手を煩わすことが減っていきました。

上手くいくもう一つの要因に気付きました。「相手と何度か顔を合わさざるを得ない」ことです。面前の人間を罵倒できる人はなかなかいません（だから逆に電話だとこじれる）。会ううちに、私が若かったこともあり「まあお前じゃこれぐらいで勘弁してやる」と話がまとまる、しまいにはお茶まで出されたりもするものです。

2　相手を〝出させる〟

「自立した子に育ってほしい」「学力を伸ばしたい」…対保護者、ときには対教員、最終目標は同じなのに、そこに至る方法をめぐってぎくしゃくすることはよくあります。しかし、「自分はこう思う」ばかりを前面に押し出すとか、逆に「自分が我慢すればよい」では、コミュニケーションは絶対にうまくいきません。

かつて剣道の師に言われました。「君の剣道は自分勝手だ。自分が打ちたいところだけを打っている」「打ちたければ相手を出させて、そこを打つんだ」。日常のコミュニケーションと全く同じ。相手の心のあるところをみて自分の心を乗せているか。自分の意見を通したいなら、そうなるように相手の心を動かしているか、ということです。つまり「○○だから（自分としては）困る」では容易に衝突しますが、「□□だと（あなたが）困りますよね」なら、相手から動いてくれる（かもしれない）のです。

SNS文化、ストレス社会の象徴か、面と向かっての対話を厭い、いっぽうで真正面から相手を叩き潰すような「論破」がもてはやされ、まして今や大国の指導者までが自分勝手な言動を繰り返している現実には目を覆うばかりです。

歴史にも対照的な人物がいます。かつて江戸中期、6・7代将軍を補佐し政治改革を担った学者・新井白石（あらいはくせき）は、有能のあまり弁が立ち過ぎ、幕閣から「鬼」と疎まれた結果、表舞台から去りました。一方で幕末の勝海舟は、江戸総攻撃をちらつかせる西郷隆盛に対し、「内乱になれば列強諸国を喜ばせるだけだ」「江戸を焦土にすれば官軍は恨みを買うだろう」と、国全体の利益を説いて西郷の心理を揺さぶり、江戸無血開城に導いています。

どんな正論も、言葉を選ばないとか相手の立場・文化を尊重しなければ、ことはうまく運びませんし、人もついてきません。まして自らの溜飲を下げるための言動は、自らの未熟さや知性の欠如をさらけ出すようなものです。

私は校長就任の際、大宮開成の校訓・愛知和（あいちわ）を再定義しました。愛＝「利他の心」、知＝「的確な判断」、和＝「80億との共生」としたのは、以上のような思いもあってのことです。

とはいえ今日自分があるのは、世間知らずの若者を許し、面と向かって根気よく諭してくれた大人がいたからで、感謝に堪えません。主張もしつつ、相手の顔も立てる。動きたければ相手の心を「動かす」。私も次の世代に説いていきたいと思っています。